

2023年(令和5年)
1月31日
火曜日

夕刊

神戸新聞



自然の味を守って…
植垣米菓 株式会社
UEGAKI BEIKA

www.uegaki-beika.co.jp

私は学生時代から「薬をできるだけ使わない医療」を志してきました。医学は食生活と睡眠と歩行が主体だと思っていたからです。しかし医者になったその日からとにかく薬を覚えなければ一人前になれません。だからこれでもか、これでもか、と薬の勉強をしました。今でも毎週のように新しいお薬が出るのでついはいくのに必死です。

20年前はお薬を20種類も、なかには30種類も飲んでる人が時々、おられました。「先生、この大量の薬を全部やめたいけどいいやろか?」と聞かれました。私は「急にやめるのはどうかな。少しずつ減らしていくのはいいと思うけど」と答えましたが、その患者さんは自分の判断である日突然、全部飲むのをやめてしまったそうです。2週間ほどして私の前に現れた時にそう聞かされました。「先生、全部やめたらほらこんなに元気!」と。たしかに顔色や元気が全く違っていてまるで別人で

薬を減らすということ

随想

長尾 和宏



した。それ以来来ていませんが、その後、どうなったのでしょうか。ふと思いつく時があります。

そんなこともあり、10年前からお薬に関する本を10冊以上書いてきました。すべてお薬の副作用や減薬に関するものばかり。生活習慣病などの薬には「やめどき」があると考え、その目安を具体的に示してきました。

臨床現場で高齢者に減薬の提案をすることがあります。その時の患者さんの反応は完全に2つに分かれます。歓迎される方と怒る方。「私を見捨てるのですか!」と怒る人も結構おられます。その人は、医療機関は薬をもちょうとろだと思っているようです。減薬のメリットとデメリットの説明には時間がかかります。粘り強くやるしかありません。現在、コロナ禍でほとんどの薬が不足気味です。毎日、薬の欠品が当たり前です。しかし患者さんにとっては減薬を考えるいいチャンスかもしれません。

(長尾クリニック名誉院長)